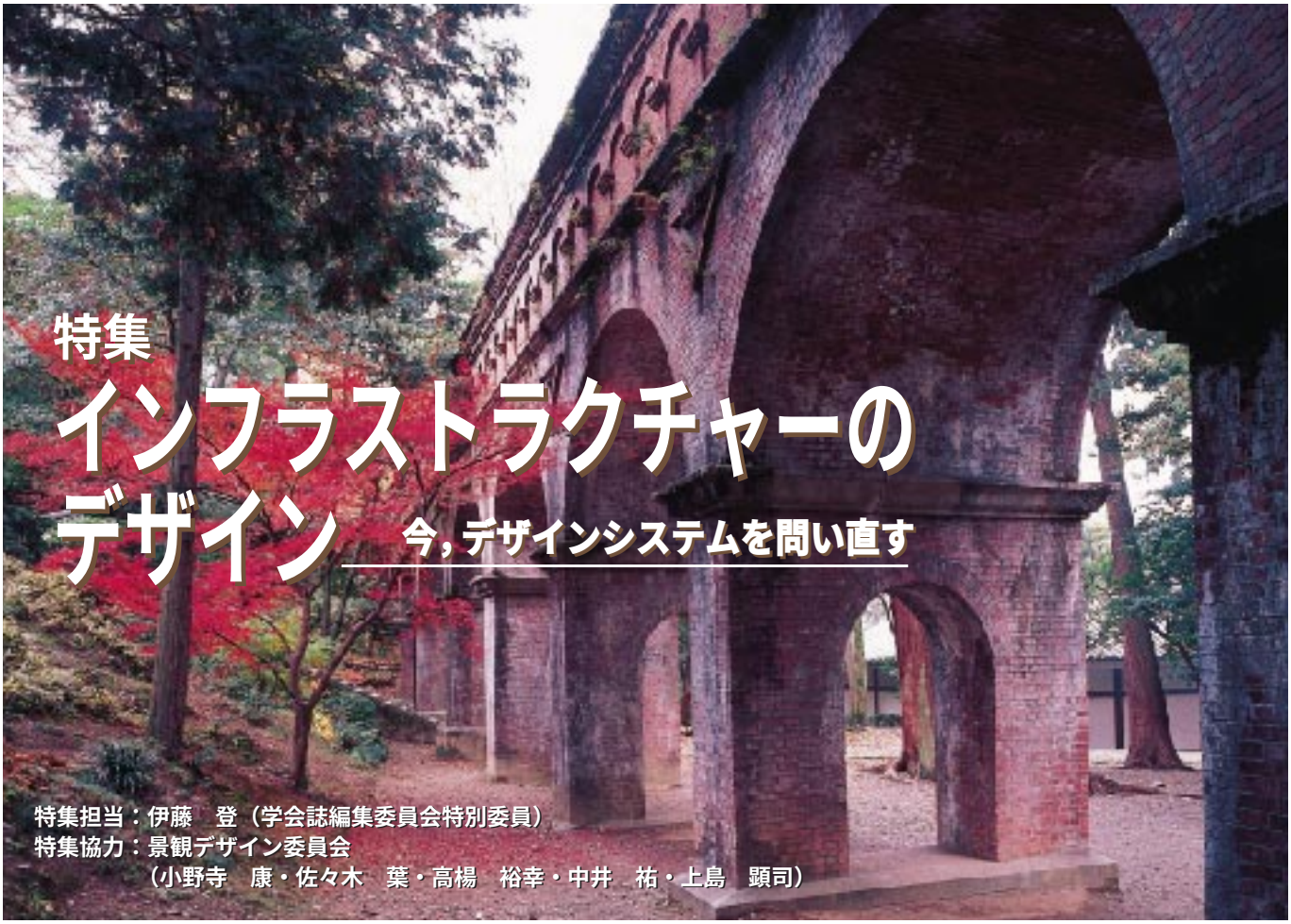


特集

インフラストラクチャーのデザイン

今，デザインシステムを問い直す

特集担当：伊藤　登（学会誌編集委員会特別委員）
特集協力：景観デザイン委員会
（小野寺　康・佐々木　葉・高橋　裕幸・中井　祐・上島　顕司）

（京都，水路閣　写真提供（株）ボンカラー）

特集の意図

正会員　工博　東京工業大学大学院助教授　社会理工学研究科社会工学専攻　斎藤　潮　Ushio SAITO

本誌が初めてシビックデザインを特集して以来 11 年を経たことを思うべきか．土木工学科で景観に関する卒業論文が初めて受理されて以来 36 年を経たことを思うべきか．いずれにせよ，景観やデザインの議論はこの国の土木界で目新しい話題ではもはやなくなっている．

にもかかわらず，この国の公共事業の現場が国土の景観保全や構造物のデザインに正面から向き合うということは，今日多いとは言えない．景観やデザインが話題にはなり，対応を図る動きは多いが，その結果は必ずしも思わしくない．海外事例を引き合いにした批判の図式には辟易しつつも，ここでは敢えて言わなければならない．こと景観保全や構造物デザインに関しては，西欧諸国に比べて素人臭が強いのである．

この国の土木技術は，景観やデザイン分野で素人でありつづけたわけでは決してない．熊本城の石垣しかり，岩国の錦帯橋しかり．また，京都の水路閣しかり，函館の笹流ダムしかり，隅田川の永代橋しかり．戦後でも東名高速道路の浜名湖 SA あたりの仕事は，現代の国宝とすべき水準だと筆者は信じている．ほかにも，広島市太田川の護岸・河川敷整備，あるいは宮島包ヶ浦の海岸整備などを挙げて振り返ると，これらの，おそらくすぐれたと言ってよい仕事は，そのほとんどがその分野でのはじめての試みを含んでいる．創意工夫があり，細部にわたるおさまりの達成がある．そのような仕事に柔軟に対応できる程度に，システムは硬直化していなかったというべきか．土木構造物の役割や構造の基本的な原理を理解しつつ，形のありかた，全体としてのまとまりを掌握しうる人材が，深く関与していたことにも注目してよい．

しかし，これらの仕事は常識にはならなかった．その一因には，景観・デザイン概念の普及のありかたがあるだろう．周到な準備期間もなく，方法を地域ごとにじっくりと考える暇もなく，おそらくこの概念は国がすすめるモデル事業とともに 80 年代後半から「普及」をみた．その頃，設計の現場では，景観や土木構造物のデザイン

の基本を学びあるいは実務訓練を受けた人材は不在に近い状態だった．加えて，大学の教育環境は，その種の人材輩出を充分にできないでいた．そして，ここが重要なのであるが，設計の現場では，専門的人材の確保を待って事業そのものを遅らせることなどあり得なかったのである．急場を凌ぐやむを得ない選択だとしても，そのことは，景観保全や構造物のデザインにかかわる機能の専門性が，事実上は否定されたということを意味する．デザインの意思決定は誰でもできるという判断が，暗黙のうちに受け入れられてきた．「普及」とはこうしたことだった．

ところで，今日，ことの重大さが別の方面から浮き彫りになってきた．インフラ整備技術の「市場」がグローバル化し，低コストで良質のものを生み出す能力において国際競争力をもたない企業は生き残れなくなってきたのである．当然ながらその良質という評価には環境や景観への配慮の仕方や構造物のデザイン能力という観点も含まれる．素人仕事では事態は打開できないし，逆に，職能としての専門性が激しく問いなおされるであろう．

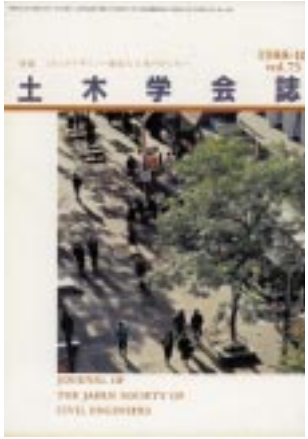
今こそ，この分野に競争原理を導入すべきだという声もあがる．しかし，デザインを含む良質の判定は成しうるのか．判定の公準が提示できないなら，それはつねに恣意的になる．だからこそ，判定者を複数にして公平性を維持すべきである．それでは，判定者として信頼に足る専門的職能をいかにして選定するのか．課題は多い．

競争原理が有効に働くような体制の見直しもまた急務だといえる．構造物単体や事業範囲内に価値判断を押し込めず，幅広くものづくりや環境づくりを考え，おのおのの事業でそれを一貫して引継ぎ分担できれば，まとまりある使いやすい空間が生み出せるであろう．しかし，現実には縦割行政がその前に立ちはだかる．しかも予算の単年度主義が腰を据えた計画・設計の準備を阻む．行政担当者は 2，3 年で異動になり，その都度，計画・設計・施工の一貫性は揺らぐ．また，設計と施工を分離した現システムでは，施工から設計へのフィードバック，設計から施工へのチェックがスムーズにいかない．これでは非効率な施工を強いられる恐れがあり，また，設計に充分な時間をかけても最終成果の品質は保証されない．

本特集は，こうした複雑な課題群を正面から見据えようと踏み出した第一歩である．まず，発注・受注双方の関係改善の努力，デザイン検討方式の模索などのこれまでの道筋を通観した（「特集シビックデザイン－身近な土木のかたち」以降 の10 年）．次に，デザインの意義についてさまざまな市場場面における論説をまとめ（「企業のデザイン戦略－企業に何故デザインが必要なのか？」），社会資本の質とデザインシステムとの関係について多角的に検討するため各界から論客を募った（「座談会」）．しめくくりとして，システム改革の将来を展望した（「成熟時代のデザイン生産を想う」）．そして最後に，ヨーロッパにおける公共事業とデザインコンペとのかかわりを紹介することとした．次の一歩に向けたご助言を読者諸兄に仰ぐ次第である．

末筆ながら，この困難な課題について執筆に応じて下さった各位と，この特集の編集をご支援くださった学会の皆様に深く感謝申し上げたい．

土木学会誌1988年10月号・特集目次

特集　シビックデザイン－身近な土木のかたち－

I.　シビックデザインの歩み
II.　シビックデザイン各論
　人道橋・小橋梁／舗装／駅／公共施設の広場化／街路・街区／護岸・堰・水制工／階段・擁壁
III.　地域の気候・風土とシビックデザイン
　寒冷地の道路／雪国／南国
IV.　シビックデザインの周辺
　自然材料－石・木－／人工材料－タイル・レンガ－／色彩／都市の夜間照明
V.　座談会・シビックデザインをどう育てるか
コラム：シビックデザイン・城／市民生活・イギリス／イタリア／フランス／西ドイツ／中国／オランダ
VI.　シビックデザインの風景
VII.　シビックデザインコレクション